

源氏物語の俗訳本

春 日 政 治

一

自分は最近福岡市内の某古本屋で、源氏物語の一写本を得た。美濃半紙を無造作に紙よりでとして、表紙もない一綴りである。中は帚木(四十二葉)と空蟬(十二葉)との合冊であつて、両巻共に欠けた所はない。相当熟れた上代様の平仮名で本文を写し、その行間にこれも巧みな細字で片仮名漢字交りの訳文を書入れてある。而もそれが本文全章の通解を口語で書きつづけたものである。但し本文の側に短い語句の添注や補注を記したのみで、全文の訳を欠いた所が五枚余りある。尙訳文以外に難語や典拠などについての補注が間々別に加えられている。本屋はこれを青柳種信関係の写本類の中に買つて来たというが、時代は種信の頃より後のものらしく、紙質や書体から見ても凡そ幕末ごろのものであらう。そうしてそれが福岡地方の人の作であることは、後に述べる如くこの地方独特の方言の交つているのに知られるのである。自分がこの本を読んで、第一に目を止めたのもその点にあつた。

顧みれば三十年以前、自分はこの地に於て「小学方言講義」とい

う一写本を見つけたことがあつた。この書は福岡藩の儒者井上周磐(一七八三—一八六三)が、朱子の小学を福岡方言をもつて訳解したものであつて、珍しくもあり又百余年前の福岡方言を知るのに興味を覚えたことであつた。文学研究第四輯拙稿「小学方言講義より」参照然るに今はからず国文ものの講義に博多方言の入つたものに接して、一種の奇縁を感じたのであつた。この本が果してどの巻まで作られたか明かでないが、桐壺の巻だけはあつたに相違ないと思われるのに、紛れて見られないのは惜しいことである。

今訳文の例をあげる。原本は古仮名づかいに従っているが間々誤つたものもあり、又濁点を欠いたものがあり、送り仮名も不完全であり、句読点は全くつけてない。今すべて原本のままに出すから、読みにくくとも推読を乞う。但し濁点だけは補つておいた。引例の下(一)の中のハは帚木、ウは空蟬の略符である。

サテ五月ノ比霖雨晴マナキニヨツテ此比ハ内ニバカリキ玉フ処ニ又ゾロ大内ニナニカ御ツ、シミゴトマデサシツバキ出来テイヨノ禁廷ニナガキシ玉ヒテ左大臣ノ方ニモ参リ玉ハヌニヨツテ大殿左大臣殿ニハドウ云コトカ自然違変ノコトドモハアルマ

イカト源ノ心中ヲオボツカナクウラメシクオボシタレドトニカ
クコテツケンノ存念ナレバ夫ト色ニモ出サズナホノ手厚ク心
ヲイレテヨロゾイロノ装束其外ナニヤカヤトメヅラシク源
ノ氣ニ入ヤウニサセラル、 (ハニウ)

サテ向ヒキタランヲミバヤト思ヒテ源ハ今ノゴタチノ詞ヲキ、
チ是ハヨヒ折カラ参ツタ其向ヒキテ碁ヲウチヲルサマヲ見タヒ
モノヨト思ハレテヤヲアラユミ出テスダレノハザマ間也オロシ
テアルスダレノ間ニ入ラレマシテゴザル此只今小君ガ遣入タア
トノカウシハ其マ、アケハナシテマダサ、ザレバヒマガアツテ
奥ノ方ガミエソウデアアルニヨツテ東ノ方カラヅツト西ザマニミ
通シテミラレマシタレバ此キハノ所ニ立タル屏風モハシノ方ハ
押タ、マレタルニ其上女ノソバノ木丁マデモ今夕ノアツキ故デ
バシアルカシテトリアゲウチカケテアル故ニ目前何サヘ目ザハ
リニナルモノガナイ故イトヨクミ入ラル元ヨリ女ドモノ処チカ
ウ火ハトモシタリ向ヒキル有様委シウ分ル (ウ三ウ四オ)

以上の例の傍線を施した部分は、本文そのままを出したものである。もとより多少文語も交り、殊に本文の語を挿むからぎこちなくなるが、大体口語基調であるといわれるだろう。

自註 是人情ノ道理マヘデ始ニハムツカシキ入ワリノコトヲ申
シ出シマツスルケレドモ漸々ニ退屈ノ氣ガデキテ次第ニ物ヤハ
ラカナル方ニ移ツテマキル物ヂヤ殊ニ通夜ノコトデゴザレバイ
ヅレモ睡ヲサマサントテ是ヨリドウケマジリノ雑談トナリマツ
スル (ハ一四ウ)

この文は本文の間に挿入した訳者自身の補注であつて、本文に即か

ないで却つて口語体の色が濃い。

二

さて用語についてとりわけ注意されるのは方言であつて、勿論全部に亘つてというのではないが、福岡地方に見られる土語の特徴が相当強く表われているのである。今その若干を拾つて見よう。これは作者を考える上にも必要であり、かつは現代よりやや古い方言を見得るとも思ふからである。

先ず音韻から入るが、九州に後まで残つたジヂ・ズヅの区別も筑前あたりは早く混じたのであつて、小学方言講義にも全く無区別であるが、この本にも同じであることは、仮名づかいの誤り、しかもその混淆によつてわかる。

人ノモノ云サガニクキ世ジヤ (ハ二オ)

乞度シタコトガデキヌアダ人ヂヤ (ハ二ウ)

カ、ルキズサヘツキヌレバ…… (ハ一六ウ)

此モノネタミノ方一ツガ君ガウキフシキヅト云モノヂヤ

(ハ一七オ)

カズ(数)・ハズ(筭)などのカヅ・ハヅと書かれた例も少からずある。

撥音ンをもつ語につづく助詞ハ・ヲは所謂連声(音の同化)によつてナ・ノとなるもの、

此年月感心ノ致シテイマシタ (ハ一九オ)

一端ナ童殿上ナドモサセタイト思ハヌデモゴザリマツセナンダ

(ハ三三オ)

目入ブンニヒロゲテ拝見ノイタス (ハ四一オ)

元ヨリ自分ナニトモナケレドモ…… (ウ八ウ)

これは今も聞かれる癖である。

動詞の活用二段が一段化せられずに保たれていることは九州方言の特徴であるが、この本には一段化して用いられた例は一つも見えない。只一つウラミルという語が見えるが、これは特殊な語であること、後にいう如くである。又すべての活用に四段化しようとするのも九州の強い傾向であるが、その例は余り見えない。只一つ

アナタニ上レト違フ所モナウ仰セラレタ (ハ四二ウ)

というのがある。これらは用心したろうが、うつかりお里が出たものであろう。

早く四段化したウラム(恨)という語が、小学方言講義には古い上二段形を残しているが、この本の同じであるのが興味深い。

悉ク御ミセ下サレトエンジウラムルニヨツテ…… (ハ三オ)

外ニワレヲウラミラル、ヤウノコトシタコトハナイ (ハ一七オ)

しかるに、この後の例に続く文に、

決テウラミルコトハアルマイガノ (ハ一七オ)

という一段形が見える。とかくこの活用の動いていたことがわかる。この語は今殆ど四段化して、二段は純な老人の間にだけわずかに聞かれる。

動詞のマ行・バ行の四段活にテ・タのついた場合、撥音便とならずにウ音便を取るのが九州の特徴である。

ツイヂナドノクヅレヨリ其女ノ家ヲ見コウデミマスレバ……

(ハ二〇オ)

源ノムツマジウノタマヒマツハサル、ハウレシイコトヂヤト

悦コウデラル (ウ三オ)

モヌケヲトメテ身ヲカヘテ化生シテドコニカトウデイタヤウニ…… (ウ二ウ)

サ行四段のイ音便を取つたのも只二つだけ表われている。

我ヲ見捨ハキラヌト思フカラチト慢心ガサイテマキツタ (ハ一八オ)

火はほのぐらきにヂツトスカイテみたまへば…… (ハ三五オ)

これらは今も一部には残っている。

形容詞のカ活用の表われたものは只一つだけある。これはつとめて避けたものではなからうか。

イトヨウヨカアンバイニイヒナシ玉フ (ウ八ウ)

形容詞の接続形即ちクテ又はウテはウシテとシを入れる癖も見える。

物ネタミノフカウシテハヨホド心ヲセネバ…… (ハ二五オ)

風病が甚重ウシテコタエラレカネテ…… (ハ二六ウ)

ドウモ心ボソウシテネイラレヌ (ハ三五オ)

形容動詞のナリ活をカリ活にしたものもある。

人ワロクハシタナカリケル十分カラヌ御物語カナトテ…… (ハ三三オ)

この「十分カリ」は方言講義にも見える。

指定の助動詞は無論ヂヤであるが、これは九州とばかりも限らない。存在のテヲルをトルというもの、

アノ胡乱ナモノドモノ娘ナレバホドガシレトルト思カギツテ……

… (ハ七オ)

継続を表わすラルもあるが、更にヨルとなつたもの、

其向ヒキテ碁ヲウチヲルサマヲ見タイモノヨト…… (ウ三ウ)

一々ニ我ヲトガメヨツタノモ自然外ニ心ヲカハセル男ナドガアルニヨツテ…… (ハ一八オ)

過去の想像にツラウを用いた例。

未永ウ相見ルシヤウモゴザツツラウモノヲ…… (ハ二四オ)

心ガアツテノコトドモデハナカツツラウカ (ハ一八オ)

過去の打消にナンダは広く西部方言の形であるが、最西部にはザツタ若しくはジャツタを用いる。

カハツタコトモゴザリマツセナンダガ…… (ハ二三オ)

トウトウ参ラジャツタガ我為ヲ実ニオモハヌ故デアラウ

(ハ四二オ)

今博多ではンジャツタという重複否定の形を用いる。

ここに際立つて表われているのは、丁寧の助動詞マツスルである。この語は促音にしないマスルも交つてはいるが、大多数が促音形を取っている。

ドチラガドチラトモ段ドリハサレマツセネバトモニ中ノシナニ

ゾオクベキ (ハ五ウ)

イカデカ御身ノコトラアサク存ジマツセウヤ (ハ三七オ)

後ノ卷々ニアルコトラ申シマシタルコトニテ…… (ハ二オ)

時ニ女モ返歌ヲツクリマツスル (ハ二三ウ)

車ヨリオリテワカレマツスル時ニ…… (ハ二〇オ)

オモウテラルヤウニミエマツスレバソレモラウタゲ也

(ハ二二ウ)

連用のマシだけは促音にならないらしく、促音の例がない。命令は無論マツセイであろうが例が出ていない。現代の福岡ではマツセウ(未然)・マツセ(命令)などを稀に聞くにとどまるが、老人の口にはまだマツスル・マツスレを残している地方もあるようである。この促音形は方言講義が全く同じで、連用のマシだけが促音でなく、命令はマツセイであつた。

る。

誰ニゾ乱レ心ドモハナイコトヤラ (ハ二オ)

此馬頭ニ見カガラレドモハスマイカト…… (ハ一五ウ)

出家シテ世ヲソムクドモヨリ外ノコトハナイ (ハ一七オ)

昔物語ナドニドモアリソウナ…… (ハ二三ウ)

強意の助詞バシも頻用されていて、九州のものらしい。

其咄ノ内ニ自身ノ上ニモアタルコトバシアルカシテ……

(ハ四ウ)

今夜ハナスソウナトバシ思タガ物モイハズ (ハ七オ)

トカクノ内ニ碁ヲ打チシマイバシ仕リマシタヤラ…… (ウ六オ)

仮定逆接の条件につくトモ又はテモの意の普通トコロガというのに、トキガ又はトキニガを用いたものがある。

誰人ノ見マシタ時ガ是ハ故アル女ヂヤト見エウ (ハ一九ウ)

イクラ詮サクヲシテミタ時ガ(中略)心ニ叶ヒ難カラウ

(ハ二五オ)

少々ノオクレタル所ガ有タ時ニガソレヲアナガチニ無理ニモトメ出シテ事ヲ加ヘヌガヨイ (ハ二〇ウ)

これも老人の間には今も残っている。

疑問詞につくサヘが一種の係をなして、強く否定するに用いる。

目前ニ何サヘ目ザハリニナルモノガナイ (ウ四オ)

云立テミレバドコサヘヨイ所ハナイ (ウ五オ)

これも老人などには今もナニサヘ又はナニサヘニと用いられている。

コソの係結は早く失われて、只条件句となる場合にのみ比較の後まで存していて、方言講義にははつきり残っていたが、この本にも見える。

ウツ、トモ覚エズ夢ミタヤウニコソゴザレ根元数ニモアラヌ身ナレバ…… (ハ三六ウ)

女中ナドノ方違コソ夜ゴミニ急ガル、コトモアレサヤウニ夜フカク御立ニナルニハオヨビソモナイモノヂヤ (ハ三八ウ)

ワガ身ノ分際相応ニテコソヨケレ分ニ過ギタルコトハセマイ (ハ四二ウ)

ヨシ／＼姉コソ我ヲ見捨テタレ今ハ汝ナリトモセメテ見捨テクル、ナ (ハ四五ウ)

なども、文語に引かれたのみではないように思われる。

語彙についてであるが、近代の方言らしくて、東国産の自分には聞きなれないものが、この本には相当交っているが、地方専用のものか否かについては、まだ調査が行きとどかないから省くことにする。ただオラブ(叫ぶ義)という語が方言講義にも見えたが、これは万葉語の残ったものであつて、九州に特異な語彙であり、この本

にも折よく見えている。

こゝに人ともえのゝしらずヲラビモキラズ (ハ三六オ)

この一語でもつて、むしろこの地方語の代表となり得るかも知れない。

以上は少し長すぎたが、この書の訳文に表われる方言が、大体福岡地方のものであり、それに現代よりもやや古い点のあることをいう為であつた。

三

さてこの書の本文は勿論青表紙系であつて、殆ど湖月抄本に合う。殊に仮名づかいの古用を誤つたものが少い。毎巻の初頭にその巻の解題を附けた手法が、湖月抄に拠つたことは著しいが、本文の校合や引用された補注は、主として萩原広道の評釈によつて、花鳥余情・玉の小櫛・源注余滴などの解も出ているが、それらは皆評釈からの採引きであるらしいのである。これは一面この書の年代に目安をつけるのであつて、少くも評釈の初部分の出版された嘉永末年以後と見なくてはならない。口語が小学方言講義と共にやや古いのと会せ考えて、今より約一〇〇年前のものとする位が妥当ではなからうか。

ともかく訳者は新注を見ている人であることは勿論、中には自註などというものも見え、間々異見を立てている所もあつて、源氏には一通りの素養をもつた研究家であつたろうことが想像される。恐らくは福岡藩士などの国文学に通じた先生格の人ではなかつたろうか。

訳文は一度書下したものを、更に加朱して補訂している。評釈を用いたのも多くはその際にある。さて訳文を読んで感ずる一つは、文における口調が、対手をおいて語っている如く考えられる個所のあることである。

先此帚木卷ハ只今モ申シタル如ク此物語一部ノ序ノ如クナルヲ…… (ハ二オ)

これは帚木の訳の最初にある語であつて、「只今モ申シタル如ク」というのは、巻首の解題を指したのである。

余ノ並ノコトハ今ヨリ申シテモ空ニテハ御勘弁ノツキ難キコトアリテトクト御覚悟ナリニクキ故其卷々ノ所ニ至リ此卷ノ如ク引アテ、申セバ速ニ御承知アルコトナレドモ先其大意ヲ演置マツスル (ウ一ウ)

これは空蟬の巻首にある解説であるが、全く人に対して説く語調を見る。

次に前に挙げた文例にも見えるように、訳文中に本文をそのまま挿入するのは、本文を読みつつその訳をつけて行つた跡であつて、これも講義する際の手法と見なくてはならない。

女モエヲサメヌスヂニテコラヘラレヌヤウスニ成テ私ガオヨビ指一本ヒキヨセテクヒテ侍リシクヒツキマシタニヨツテオソロシゲニオドロ／＼シクソレヲカコツケニシテ…… (ハ一六ウ)

といった調子である。尙本文の和歌は訳の中にもそのまま書出しておいて、その下に歌の訳をするのが例になっているが、間々和歌を省いてそこに次のような朱書きをしたものがある。

奥ニ歌ヲ一首ソヘテゴザリマシタ此間ニ歌一返素読山ガツハ田

舎者ノコト垣ホトハタダ垣ノコト…… (ハ三オ)

右の傍線の部は朱書きで、歌を省いた個所である。この同例で「此間歌素読」・「歌素読」など朱書きしたのが五六個所見える。これらも亦講義する際の心覚えにしたとより外考えられない。これらを見ると、この訳はある対手に向つて講義する際のノートに作つたものではないかと考えられる。敬体口語で記されたのも、要するにその為であつたと思われる。

元来現代以前の物語類の解釈はそれが注釈といわれたように、語句片々の意解より成り、全章を通じて訳文したものはなかつた。しかのみならずそれが殆ど文語であつて、口語をもつて書いたものは求められない。かの加藤宇万伎の「雨夜物語たみ言葉」なども、たみ言葉とふれ出しながら全然口語訳ではない。この書は已述の如く講義に用いたものであるらしいから、広く世に示すものではなく、まして公刊などするものでもない。従つてその行文を推敲するといふような用意をば全く欠いた俗文であつて、勿論名訳とは言われなものであるが、ともかく読下して一往話の筋の通つてゐるものであつて、現代に出た口語全訳に先がけて、早くこうした形のものが存すること、しかもそれが我が福岡のある人によつて作られたことは、少くも郷土的に珍しく感ぜられるものである。

(昭和三十四年十月二十三日稿)

—九州大学名誉教授、文博—